
ゼロの神機使い

ヒロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロの神機使い

【Nコード】

N9862P

【作者名】

ヒロ

【あらすじ】

この小説は、『ゼロの使い魔』と『GOD EATER BURST』のクロスオーバー作品となります。GOD EATER BURSTのミッション「蒼穹の月」においてMIA（戦闘中行方不明）と認定された雨宮リンドウが、本作品のヒロインであるルイズに使い魔として召喚される事から物語が始まります。本来召喚されるはずだった、ゼロの使い魔の主人公、平賀才人は登場しません。基本はゼロの使い魔を主軸に展開していく予定ですが、独自解釈とオリジナル設定を考えておりますので、其々の公式設定とは、異

なる点が生じる事があると思います。

第1話 異邦人（前書き）

第1話です。お楽しみ頂ければ幸いです。

第1話 異邦人

【Louise side】

私の名前は、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。トリステイン王国の中でも有数の名家、ヴァリエール侯爵家の三女だ。

今日は、トリステイン魔法学園で行われる進級試験を兼ねた使い魔召喚の儀式『サモン・サーヴァント』の日。

昨日は期待と不安で眠れなかった。果てしなく遺憾だが、これまでともに魔法を成功させた事がなかったからだ。

それでも、期待はしてしまう。『メイジの実力を計るには使い魔をみよ』と言われるくらいに、メイジにとつての使い魔は一生のパートナーであり、大切な要の1つだ。

につつきツエルプストーはサラマンダーを召喚し、喜色満面の表情をしていた。タバサなんて風竜を召喚してみせた。

羨ましくないわけがない。クラスメイトが次々と使い魔を召喚して行く中、魔法成功率0%な私が本当に使い魔を召喚出来るのか・
・時間が経てば経つほど、不安が大きくなる。そんな中、とうとう私の出番がやってきた。

「次はゼロのルイズの番かー。」

「どうせ、爆発するだけなんだから、止めさせた方がいいんじゃないか」

廻りが噓し立ててくる。ウルサイウルサイウルサイウルサイウルサイウルサイー！！

私が騒ぎ立てる一歩手前で、担当教師のコルベール先生から、静かにするよう注意が飛び、召喚を行うように促される。

ぶつけどころを無くしたイライラを残したまま、不承不承ながら
も気持ちを切り替えて、召喚に臨んだ。

「我が名はルイズ・フランソワ・ズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール」

これで失敗すれば、留年か落第、もしかしたらここにいる事すら許されなくなるかもしれない。

「五つの力を司るペンドラゴン！」

貴族の誇りにかけて、それだけは避けないといけない。今ほど、成功して欲しいと強く願った事はなかった。

「私の運命に従いし、“使い魔”を召喚せよ！」
だから、どうか成功しますように！！

瞬間、景色を眩い光が包み込んだ。

【??? side】

気がついたら見た事もない場所にいた。

特務の最中に、いるはずのない第一部隊の仲間と合流した俺は、
数瞬後に複数の大型のアラガミに襲われた。まさに四面楚歌、絶体
絶命、俺は退路も断たれて、あいつらだけでも逃げるように命令し
た所までは覚えている。

だが、そこから先の記憶が曖昧だ。とりあえず、自分の状態を確認する。

外傷は、多少まだ残っているが、ほとんど問題ないレベルに回復している。神機も無事みたいだな。どうやって助かったのかは分からないが、運がいい。

それにしても、ここは一体どこなんだ？アラガミによって自然が破壊され、異常気象が日常化している今の地球に、こんなにも長閑

で緑溢^{みどりあふ}れている平和な場所なんてあるわけないんだが・・・
それに、周りにいる子供達と、異形^{いぎよう}のモノ。あれは新種のアラガ
ミか？しかし、特に危険性は感じないし、中には抱きしめている子
すらいる。

周りの様子を窺^{うかが}っていると、先程まで正面に立っていた少女が中
年の男性に向かって、騒ぎ出した。

（コルベール先生、お願いします。召喚の儀式をやりなおさせてく
ださい！）

（それは無理です。『サモン・サーヴァント』は神聖な儀式。たと
え召喚したのが何であろうとも、召喚のやり直しを行う事は認めら
れません）

（でも、平民を使い魔にするなんて聞いた事がありません！）

何か話をしているようだが、言語が違う為何か何を言っているのか
さっぱり分からない。

すると、今まで静かだった周りの子供たちも騒ぎ出す。

（ゼロのルイズが平民を召喚したぞ）

（サモン・サーヴァントを成功させる自身がないからって、その辺
の平民を連れてくるなよなー）

どうやら先程の少女を笑いながら囃^{はや}し立てているようだ。状況が
掴めずに、呆然としていた俺の元に、先程騒いでいた少女が近づい
てくる。

（あ、あんた、感謝しなさいよね！貴族にこんなことされるなんて、
普通は一生ないんだから）

今度は、俺に向かって話しているようだが何を言っているのか当然判るはずがない。

言葉が通じない事を向こうにも理解してもらう必要がありそうだな。とりあえず何か適当に話しかけてみるか？　俺がここの通常言語を知らないだけで、向こうはこっちの言語が理解出来るかもしれない。

「こんにちは、お嬢さん。そちらが何を言っているのか、さっぱりなんだがこちらの言っている事を理解する事は可能かな？」

（っ！！！！　ああー、もう！！何を言ってるのかさっぱりじゃない！言葉も通じないとか、一体どこから来たってのよ！この平民は！！！！）

なにやら、大層ご立腹のご様子だ。どうやら、向こうにもこちらの言語は理解出来ないらしい。

場所は判らないし、言葉は通じない。当然行くあても戻る手がない。命の危険が無いだけ、気がつく前よりはマシだが、八方塞（さ）な事には違いないようだ。

（ちよつと、あんた。そのままだと契約出来ないじゃない！！とりあえず、しゃがみなさい！）

目の前の少女がまた話しかけてくる。どうしたものかと考えていると、服の袖（そで）を強く引つ張られた。

・・・座れと言っているのか？

俺は少女に促されるままにその場にしゃがみこんだ。少女と目が合う。サクヤを始め綺麗（きれい）所が揃っていたフェンリル極東支部（きょくとうしぶ）の連中にも引けをとらないほどの美少女だった。幼いが瞳は綺麗な鳶（とび）色で、目鼻立ちも整っている。髪型は桃色がかったブロンドの長髪。後、

10年もすればかなりの美女になるだろう。将来が楽しみだ。

そんな事を考えていると、少女がまた何かを言い始めた。しかし、それは俺に話しかけているのではなく、まるで詩を独唱どくしょうするかのようつむに言葉を紡いでいく。

（我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。
五つの力を司るペンタゴン、この者に祝福を与え我の使い魔とな為せ
！）

少女が独唱どくしょうを終えると、突然押し付けるように口づけをされた。
突然の事に思考が止まり、呆ほうけていると、

「グオツ！」

急に左手の甲に痛みが走り、思わず右手で押える。視線を向けると見た事のない文様が浮かび上がっている。

「クツ！これは、一体・・・？」

「『使い魔のルーン』が刻まれているだけよ。すぐ終わるわ。」

今まで、まったく通じなかった言葉に返事がある事に驚き顔をあげると、先程の少女がそっぽを向き横目でこちらの様子を窺うかがっていた。照れているのか、顔が真っ赤だ。

「言葉が通じるようになったのか？」

「あら、ホントね。契約したからかしら」

「・・・『使い魔のルーン』に、『契約』か、嫌な予感しかないが、色々と聞きたい事がある。」

俺が少女に尋ねようとした所で、先程少女と話していた中年の男性が俺たちに声をかけた。

「どうやら無事に、『コンタラクト・サーヴァント』は成功したようです。質問には、私がお答えしましょう。」

「貴方は？」

「私はここ、トリステイン魔法学院で教師をしている。ジャン・コルベールと申します。」

このコルベールと名乗った男性は今なんと言った？『魔法』・・・と言ったのか？

「俺は、フェンリル極東支部 第一部隊所属 雨宮リンドウ少尉だ。今、『魔法』と言ったのか？」

「言いましたが、それが何か？」

どうやら俺の聞き間違いではないらしい、しかし、魔法と来たか・・・。

「少尉という事は、リンドウ殿は軍人なのですか？しかし、フェンリルなどという組織は記憶にありませんが。」

フェンリルを知らない？バカな。フェンリルは元々製薬会社だったが、唯一アラガミに対抗する事ができる『神機』を開発し、それを扱う適正を持った人間『ゴッドイーター』を有する人類最後の砦だ。小さな子供でも知らないなんて事は、ありえない。しかし、コルベール殿は知らないと言っている。そして、『魔法』という未知の力。コルベール殿の言っている事が嘘でも冗談でもないとするれば・・・。

「軍人というのはあながち間違っていないが、微妙な所だな。俺は気がついたらここにいたんだが、それは何故だ？」

「それは、「私があなただを、使い魔として召喚したからよ」ミス・ヴァリエール。」

コルベール殿を遮^{さへぎ}って、今まで様子を見ていた少女が割って入った。先程からの流れでまさかとは思っていたが、やはりそういう事なのか。

「生憎^{あいにく}だが、俺にはやらないといけない事があるんでな、使い魔とやらになってやる暇はないんだ。仲間も心配してるだろうから、すぐにでも戻らないといけない。」

「そんなっ！！？」

俺の発言を聞いた少女は、驚き戸惑^{とまど}った様だが、すぐに落ち着きこんな事を言ってきた。

「ふ、ふん！？ 戻るってどうやって戻るつもり？ 言つとくけど、私、呼び出す事は出来ても、それを送り返すなんて真似できないわよ。」

「それは……」

「大体、そんな事出来るなら契約する前にやってるわよ！ 平民の使い魔なんて、こっちから願い下げだわ！」

勝手に連れてきておいて、酷^{ひど}い言い用だな、おい。確かに、ここが何処だか分からない上に、召喚者の少女が戻せないとなると（真^し偽^{んぎ}は不明としても）、戻る為の手段を探さないとけない。行くあてもない今の状況よりは、形だけでも使い魔という形で納得して、生活の基盤^{きばん}を手にする方が賢明^{けんめい}か……ったく、厄介^{やっかい}な事になったもんだ。

「ふう、分かった。君の使い魔になろう。」

「ふん！当然じゃない！もう契約だってしてるんだから！」

「そうだったな。改めて自己紹介だ。俺は雨宮リンドウ。リンドウとても気軽に呼んでくれ。」

「アマミヤ・リンドウ・・・変わった名前ね。私はルイズよ。ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。」

「ルイズ・・・なんだって？」

「ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールよ！！何度も言わせないで！」

「やたら長い名前だな。取りあえずルイズだな。これから宜しく頼む。」

そう言つて、右手を前に出し微笑みかけた。

「し、仕方ないから宜しくしてやるわよ！感謝なさい！」

何故か頬を赤らめて、顔を逸らしつつも握手に応じてくれた。これで取りあえずは当面の生活には苦労しないで済みそうだ。話も一区切りついた所で、俺は胸ポケットから煙草たばこを取り出し、火を付けた。するとコルベール殿が興味深そうに俺の左手を見ている。どうしたんだ？

「珍しいルーンですね、初めてみる。写さしてもらっても宜しいか？」

「・・・好きにしてくれ。」

俺の返事を聞くと、コルベール殿は文様を真剣に写し始めた。その間、俺は一服させてもらおう。

「ところで、その口に加えているものはなんですか？」

「あ、これか？煙草だけど、知らないのか？」

「煙草というと、学院長が吸っているパイプで吸うあれでしょうか？」

「多分、そうじゃないか？その使い棄^すて版みたいなものだ。」

「なるほど・・・よし、写し終わりました。」

そう言っ、俺から離れたコルベール殿は周りにいる生徒達に呼びかけた。

「これにて、サモン・サーヴァントを終了します。各自、教室に戻ってください。」

そう言っから、改めてルイズと俺に向き直り、

「ミス・ヴァリエールは、午後の授業は免除します。彼と今後について話し合ってください。」

と、言い残して生徒と共に空を飛んで移動を始めた。っ、ちょっと待て！空まで飛べるのか？魔法ってのは、便利なもんだな。

「それじゃあ、行きましょう。ついてきて」

そう言っ、歩き出したルイズの後を追う。これからについて考えながら・・・。

第1話 異邦人（後書き）

皆様はじめまして、今回の作品が初作品、初投稿となります。

色々な方が書かれたクロスSSを読ませて頂き、触発されて勢いで書いてしまいました。

取りあえずの目標として、アニメ1期の終了個所までは書きたいな
と思っております。

稚拙な文章の上、亀更新になるとと思いますが、楽しんで頂ければ
幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9862p/>

ゼロの神機使い

2011年1月12日23時05分発行